

吉川 昌江 准教授

名古屋市生まれ。金城学院中学、高校に学び名古屋市立大学薬学部入学。病院勤務後、同大医学部で研究員として研究をしながら、一般企業の健保診療所で薬剤師として勤務。2005年、糖尿病専門の調剤薬局を開局。2010年から金城学院大学で教鞭を執る。医学博士。日本糖尿病療養指導士。



薬学部 薬草園温室にて

臨床の場で「強く、優しく。」を体現し 社会に貢献できる薬剤師を育てたい

「患者さんから、あなたに会えてよかった、と言ってもらえる薬剤師を育てたい」と話す吉川昌江先生。

医学博士、日本糖尿病療養指導士の資格を持つ薬剤師として病院や調剤薬局で実績を積み、糖尿病・生活習慣病の患者さんを支援されてきました。

ご縁に導かれ自らも中学、高校と学んだ金城学院へ。大学のスローガンである「強く、優しく。」はまさに薬剤師に必要な能力であるとの思いを抱きながら、日々熱心に指導に当たられています。

動脈硬化研究から教壇へ 糖尿病臨床研究を指導

私は中学、高校と金城学院で、姉もいとも周りはみな金城学院で学びました。中学校・高等学校の校長長屋頼子先生とは同級生で、一緒に書道を学んだ仲です。元々数学が好きだったので理系を志望し、当時は金城学院大学に理系の学科がなかったことから名古屋市立大学薬学部へ進学しました。

入学後は体育会のテニス部に入部。その時の仲間が金城学院大学薬学部開設に尽力された故安藤裕明教授です。当時、名市大医学部循環器内科で動脈硬化の研究で学位をいただいたあと、糖尿病専門薬局を運営していた私に、安藤先生が声を掛けてくださり、金城学院大学で教えるご縁をいただきました。

私が薬剤師になったころは、臨床の場といえば医師と看護師。薬剤師は調剤室で薬関連の仕事をしていました。当時は調剤薬局もなかったのですが、ここ数年で医療も著しく変化し、薬剤師の役割も大きく変わり、医療の担い手として責務を果たしています。

現代の高齢化社会においては、薬剤師もチーム医療の一員としての大きな役割を担っていかなくてはなりません。薬学部が6年制になったのもそのためです。学生は病院実習と薬局実習を5年生時にそれぞれ11週間ずつ行っています。

私の研究室では糖尿病の臨床研究を行い、学生たちは実習で感じた疑問点や、もっとこうすれば患者さんが助かる…という気づきやアイデアを研究に活かしています。それが治療に役立つと同時に、成果が学会などで評価されることも多く、私も学生の

発想力や着眼点に深く感心させられます。



「ありがとう」の言葉を胸に 良い経験を積み、さらなる活躍を

医療職は「ありがとう」がいただける職業の一つ。地域や病院など必要とされる場もたくさんあります。薬剤師になるには薬や医療に関する多くの知識を修得せねばならず、仕事に就いてからもずっと研鑽を積んでいなくてはなりませんが、その分努力が報われる、やりがいのある仕事だと思います。

学生たちには、患者さんから「あなたに会えてよかった」と言ってもらえる薬剤師になってほしい。「あなたがいたから助かった、うれしかった」と言われる薬剤師にぜひなってほしいと願っています。

卒業生の中には糖尿病療養指導士の資格を取り、学会に参加してくれる人もたくさん出てきました。学会の場で「先生、今私はこんなことをやっています」「患者さんからこんな相談を受けました」と声を掛けられると、本当に嬉しいです。

薬剤師になるには多くの努力と時間が必要ですし、実習のために尽力してくださる病院や薬局の先生方もいらっしゃいます。ですから、薬剤師になったからには出来るだけ辞めずに続けてほしいと思います。私の研究室の卒業生は産休後も復帰して社会に貢献し、目標に向かって頑張っている人が大勢います。良い経験を重ねることで、薬剤師という職業で社会に貢献できている、という誇りが生まれるのではないのでしょうか。

薬剤師には優しさが必要ですが、医療の現場にいる以上、強くもなければいけません。金城学院大学のスローガン「強く、優しく。」は薬剤師にとって本当に大事な言葉だと思います。私はこれからも、臨床の現場で必要とされる「強く、優しい薬剤師」を育てていきたいと思っています。

吉川先生はどんな人!?

吉川昌江研究室の6年生に窺いました。「授業のときは分かりやすく、研究のときは厳しく指導してください」「相談ごとにはアドバイスをくださり元気になれる」「憧れの存在。自分も将来先生のような女性になりたい」「薬剤師としても尊敬できるし女性としても素晴らしい方」と、学生からお手本として慕われ、頼りにされるお人柄が窺えました。

